

のことである。

これを唐畫と定める上に屈強の手がかりとなるものの一つは、畫の裏貼りに用ゐられたこの地方の戸籍の殘紙であつて、それには開元二年の調べに基づいた旨が注記せられてある。この頃の戸籍は毎年調査する各戸の計帳に據つて、三年毎に作製せられるのが定制であり、下に述べるやうに、この畫と深い關係のある樹下美人圖の裏貼りを始め、その他にもこの地から開元四年の戸籍が出土してゐることから考へると、たぶんこれも同年の戸籍の殘紙と見てよいであらう。したがつてこの畫の製作がこの年以前に遡らないことは言ふまでもないが、しかもその後あまり遠くない時代に置かれねばならぬことも、かゝる文書を反古紙として利用した點から、常識的にも判斷されるべきことである。

この畫の出土した三堡といふ處は、五世紀の末以來、漢人麴氏が九世に互つて統治した高昌國の故地で、今の吐魯番附近の哈喇和綽^{カラホージャ}はその都城、三堡はその東南の近郊に當る地である。唐の太宗が麴氏を討滅ぼしてからは、高昌は唐の直轄となつたので、唐人の來往や居住も、以前に増して多くなり、班田や戸籍の法も實施せられ、世界の都の觀のあつた長安を中心に昌えた盛唐の文化も、かゝる事情に伴つて漸次この地方に波及したのであつたが、玄宗の天寶の末からは、唐威とみに西方に衰へ、懿宗の時以來、ついに回紇の本據となつたのである。こゝに描かれてある人物の容貌服飾など、すべて唐人のそれを寫したもので、開元以後の或る時代にこの地に在つた唐人の畫家に依つて描かれたものと思はれる。

一たい樹下に人物を配する構圖は、唐代に好んで用いられたものらしく、わが正倉院の鳥毛立美人屏風を始め、